

平成30年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	30K08	氏名	館野 峻
研究主題 —副主題—	地域とともに学びのコミュニティをつくる学校・ 生涯学習社会の一員としての教職員の在り方 —立場を越えた他者との対話の場の開発と実践を通して—		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	近藤 精一
所属校	品川区立日野学園	校長	西島 勇

キーワード：コミュニティ・スクール、生涯学習、対話、地域学校協働活動

### 1 研究の背景(目的)・主題設定の理由等

近年、学校運営協議会制度であるコミュニティ・スクール(以下CS)の普及・拡大が、政策的に進められている。CSは、「保護者や地域住民が一定の権限をもって運営に参画する新しいタイプの公立学校」として、「教育改革国民会議」(平成12年)にて提唱された。その後、「地域とともにある学校づくり」への転換が、学校が直面する様々な教育課題に対応していくための有効な制度として見直され、平成30年4月には全国にある学校の14.7%に学校運営協議会が設置されている。平成29年4月には、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の一部が改正され、各教育委員会に対して協議会設置の努力義務を課すことになったことにより、その数は加速度的に増えている。

そこで、CSに関する研究を通して、これからの学校と教職員の在り方について、二つの視点で研究を進めた。1点目は、教職員一人一人が地域とともにどのようなコミュニティをつくっていくことが、持続可能な生涯学習社会を形成する担い手を育てていくことにつながるのかという視点である。2点目は、継続的な対話を通して、児童・生徒に必要な学習環境をどのように見直していくことが「すべての人が学習者」とあるという立場で、地域と学校がWIN-WINの関係性を築いていくことにつながるのかという視点である。

本研究の目的は、地域とともに児童・生徒だ

けでなく、保護者や教職員なども含め、学校を核として成長する「学びのコミュニティ」を形成していくプロセスについて明らかにすることである。

### 2 研究の内容・研究の方法

#### 【基礎研究】

- ①CSに関する教育行政の資料の収集・分析
- ②CSに関する先行研究の収集・分析
- ③ラーニング・コミュニティ、拡張的学習、ラーニング・ブリッジングに関する先行研究の収集・分析

#### 【実践研究】

- ①所属校における研究計画の立案
- ②所属校での対話の場の企画・運営
- ③対話の場の参加者へのアンケート調査
- ④教育委員会主催のCSに関するイベントの企画・運営

目的	学校や地域、家庭の「こう育って欲しい」という願いをベースに、子どもたちと一緒に「理想の学校」「学校や地域、家庭でどんなことを協働できるか」を考える。
対象	本校児童・生徒・保護者、勤務校の教職員、本校卒業生とその保護者、本校近隣に在学・在住・在勤の方々
場所	勤務校ランヂルーム
日程	6/19(土)14:00-15:30・10/30(火)16:00-17:00
<b>ワークショップ・ツール「えんたくん」を用いたワールドカフェ</b>	
内容	1回目は、「学校とわたし」「理想の学校」「理想の授業・理想の学校に近づく方法」というテーマで3ラウンドの対話を行った。 2回目は、「2030年の学校」というテーマで2ラウンドの対話を行った後、CSとしての学校のキャッチコピーを話し合った。
<b>*質問紙によるアンケート調査</b>	
勤務校で行った「ひのがくミライかいぎ」概要	

#### 【調査研究】

- ①CSコーディネーターや管理職、教育行政職を対象にしたインタビュー調査
- ②学校運営協議会への参加・傍聴

### 3 研究の結果

多重コレスポネンシ分析や計量テキスト分析（共起ネットワーク）を用いて、アンケート調査の分析を行った。児童生徒を含めた地域・保護者・教職員の対話の場をつくり、アンケート調査を行ったことで、このような対話の場が児童・生徒や大人にとって楽しく、価値のある時間になり得るといえることが見えてきた。図10

のように、属性が「児童・生徒」である場合、満足度や次回の参加意欲が高い。一方、属性が「地域」である場合、満足度や次回の参加意欲が低い。また、属性が「教職員など」「保護者」の場合、満足度や次回の参加意欲に関連しない可能性がある。以上のように児童・生徒にとって、普段関わる事が無かった多様な大人と話し合うことが、非常に有益な時間となっていることが分かった。

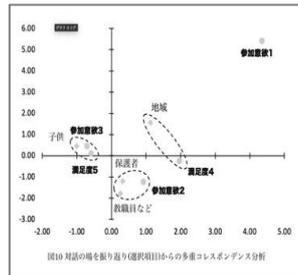


図10 対話の場を通じた属性別参加意欲の多重コレスポネンシ分析

また、CSに関わる22名の方々を対象に、面接調査として非構造化インタビューを行った。CS制度を先行して行っている自治体の取組による成果と課題だけでなく、それぞれの学校が、各校の特性や地域性（特に学校運営協議会の委員や地域人材として関わっている方）と向き合いながら、組織的・戦略的に推進していることが理解できた。

現状をしっかりと把握し、今何が必要なのかを見極めながら、中長期的な視野で地域とともに進めていくことと、児童・生徒の学びの場として持続可能な学校にしていくことが重要であるということが分かった。

### 4 研究の考察

ここまで述べてきたように、CSの仕組みは児童・生徒にとって、また学校や地域にとって有効な制度である。しかし、それが制度として機能し続けていくためには、すべての人がエー

ンシー（責任主体・行為の主体性）をそれぞれのコミュニティで発揮していくことが大切で

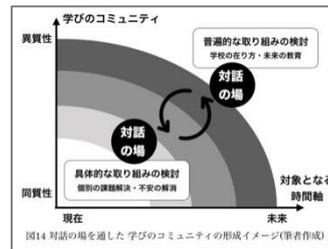


図14 対話の場を通じた学びのコミュニティの形成イメージ(筆者作成)

ある。対話の場をつくっていく上で、図1のように異質性を価値と考えながら未来を描いていくプロセスには、児童・生徒・地域・保護者・教職員がフラットな関係性で話し合いながら、連携・協働の関係を

「学びのコミュニティ」として構築していくことが必要である。

そして、学校・地域そのものが共同エージェンシーとして、すべての人が目指す目標に向かって進んでいくことを支え、

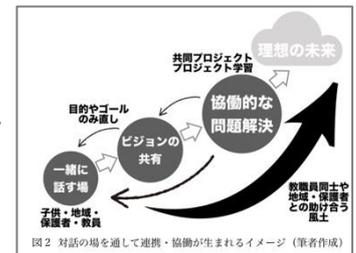


図2 対話の場を通して連携・協働が生まれるイメージ(筆者作成)

双方向的で互恵的な協力関係を対話を通して築いていく。このような生涯学習社会をつくるべくプロセスデザインが大切である。また、図2のように理想の未来に向かって、対話の場からビジョンの共有を繰り返し、ビジョン自体をアップデートさせつつ、協働的な問題解決を繰り返していくことが、CSを推進していく上で最も重要なプロセスと言える。現在は、CSとして10年以上の取組を行っている学校や数年しか経っておらず何から手を付けていいのかわからない学校、学校と地域との結び付きが強い学校とそうでない学校がある。学校経営・学校づくりとしてビジョンを共有したり、地域や保護者とのより良い関係性を構築したりする上でも、対話の場が有効であることは明らかである。

### 5 今後の展望

本研究で明らかになったプロセスデザインを複雑化・多様化した教育の課題に対応し、児童・生徒の豊かな学びを実現することのできる学校づくりのための方策の一つとして役立てたい。